

板前仁義



吉田吉之助



あんべえ

「あんべえ、どうだい」、「うん、ちったあ、いい」。
これは「身体の調子は、どうか」、「ええ、少しはよく
なった」という対話の土語であること御存知の通り。あ
んばい（塩梅）は、このように、調子とか具合い、また
は加減に通ずる言葉である。

塩梅がもつと具体性を帯びると、塩梅加減となる。加
減はプラスとマイナスである。マイナスの方は「脳タリ
ン」の如く使われて、一般に警戒されているが、プラス

の方は、あまり気にされないのが普通である。そこで、
孔子も過剰の不合理に目をつけて、「過ぎたるは、猶お
及ばざるがごとし」（論語、先進）と警告を発し、さら
に、過を誤の意に用いて、「過を貳せず」（同上、雍也）
とか、「過ちては、則ち改むるに憚ること勿れ（同上、
子罕）などと注意している。

このプラスとマイナスのかねあいというものは、たい
へんむずかしいものである。過不足を計るには、まこ
とに有り難いことである。過不足を計るには、それを料
る枘があつて、この枘が正確で、その上、枘目を正しく
する人間の心掛けが重要である。孔子が嘗て季子に仕え
ていた時の仕事ぶりが、「料量、平かなり」（史記）の

語句を似て評されている。これは、過不足なし、ということとで、プラスマイナスが均衡していることを示す言葉である。

塩梅の語は、もと、料理から出たものである。塩は塩の味、梅は酢の味をいう。味には、以上の鹹(塩)と酸(酢)の二味のほか、苦い辛い甘い味の三味があり、これを加えて五味となる。料理というものは、この五味の調和を整え、老若男女、相手のあんべえを考え、春夏秋冬の旬や、材料の出来加減を考慮に入れてつくるものである。つくり加減を列挙すれば、干し加減、切り加減、漬け加減、茹で加減、煮加減、焼き加減、炒り加減、揚げ加減、冷やし加減、燻加減、盛り加減、出し加減となる。さらに、すすめ加減、引き加減のほか、料理店では「取り加減」が最も重要である。そういういろいろな加減がイカゲンだと、料理店の経営は具合が悪くなる。

料理という字は、料理理めると読む。おさめるということは、食べたものが胃の腑におさまるばかりでなく、気がおさまらなければならない。勘定が法外だと、胃がムカついて、吐き気をもよほすようになる。そういうことと、一切を宰領するのが、料理屋の亭主で、亭主が女の場合は、特に女将と、将をつけて敬称するのが習わしである。

小魚の烹方

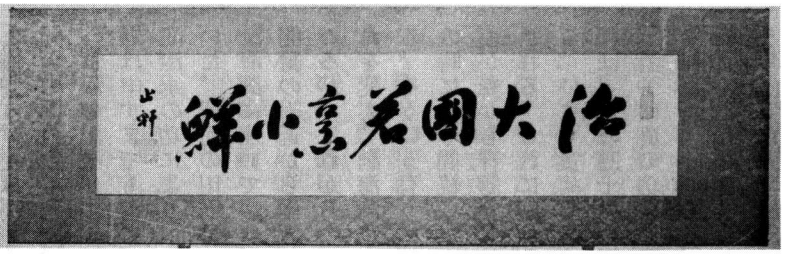
一国の大臣を宰相と称ぶ。宰相は、つかさどる、きりもりする、おさめるの意である。ここに掲げた「塩梅宰相之材」は犬養木堂(名、毅、一八五五)の書である。昭和二年、時の政友会総裁田中義一大将は内閣総理大臣として国政を宰どっていたが、その侵略的色彩を帯びた武弁政策に対し、党内派の犬養氏は甚だ不満であった。特に満洲某重大事件(張作霖爆死事件)については、親支派の犬養氏たちは憤懣やるかたなかった。田中内閣がこの事件で瓦解し、犬養氏はやがて政友会総裁となり、昭和六年組閣したが、翌昭和七年、海軍々人の襲撃にあり、「話せば、わかる」の一語を残して凶刃に斃れた。これが五・一五事件である。

そうなる前、野にいた犬養木堂は、昭和二年十一月八日、当時、日比谷にあった山水楼に来て食事をした。その時、店主の宮田武義氏に「塩梅宰相之材」と書き与えた。そして、宮田さんに、「田中宰相の塩梅の悪さにくらべて、山水楼の料理の塩梅は申分がない」と、賞讃の言葉をもらしたそうである。ここに掲げた木額は、その



犬養木堂書 (水道橋かつ吉の壁面より)

時の色紙の字を拡大して刻ったものである。梅と相と材、それに木堂が加わって、木額には似合いの文句であった。このように、料理の塩梅は政治の塩梅に通じ、特に大臣宰相には必須の語である。老中に「大国を治むるは、小鮮を烹るが若し」の句がある。これは、大国を治めるのは、小ぎかなを料理するようなもので、細心の注意を必要とする、の意であり、政治と割烹とその要領が同じであることを示唆している。そういうわけで、料理人がその腕を政治に反映させたり、発揮した例は、あとで述べるように、中国には沢山ある。日本でこのことに気がついた政治家は、犬養木堂のほか木下謙次郎など僅かな人たちにとどまるであろう。

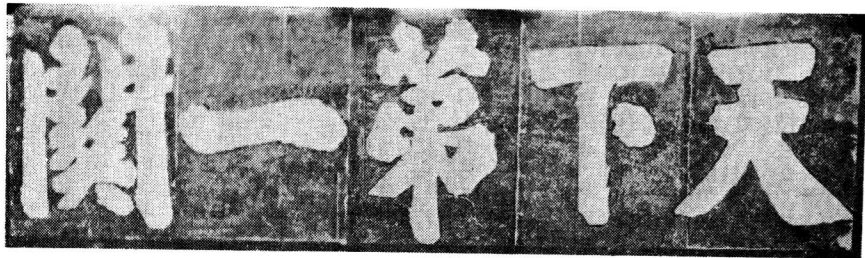


諸橋徹次先生書

馬鹿と利口

近頃、土建屋の親分が総理大臣になったとて、日本では珍らしいことと、評判である。この人が小学卒で、大学を出ていないことも話題を大きくしている。木下藤吉郎が土農から身を起し、羽柴秀吉となり、天下をとって大閥秀吉となった。これと同じようなことが日本の政治現象となつてあらわれたことに、目を瞠っているのが今の日本人たちである。

近代の日本では、灯台か境内のような国立大学で勉強しなければ一人前でないとする思潮が濃厚である。そんなわけで、国立の学校へ志望者が



水道橋かつ吉の壁面より

万里の築城

それと並んで重要なことは、北方民族の侵入という人災から免がれることであった。これは万里長城によった。春秋戦国時代の覇者の国々は、自己防衛の方策として、早くから、それぞれの国に廓壁をつくっていた。BC二二一年、秦の始皇帝が天下を一統すると、これらの古い城廓を整理統合して増改築し、匈奴など北方騎馬民族の侵入に備えた。ここに掲げた「天下第一関」は山海関の題額の拓である。秦以後、北方民族の消長に

応じて、長城は幾たびか変貌を見たが、天下第一関、つまり山海関を長城の出発点としたのは、東晋に王羲之が出た南北朝の頃とするのが定説となっている。それ故、この題字の書者は王羲之である、という伝説もあるが、これは明代の王羲之の流派の人の手になるものと見るのが正しいと思う。

さて、長城は二千年以上に亘って、よく北方民族の侵入を防いで来たが、時として、金が侵入して北宋を滅ぼし、元が南宋を滅ぼし、清が明にとって代るようなこともあった。が、長城はおおむね、中国文明を保全する効果を示して来た。土方や人足輩の力は、中国の歴史を支えて来た礎石である。

そのようにして保全されて来た中国社会の運営に、キメ細かい政治的貢献をして来たのは、塩梅の法に徹した板前風情の面々であった。

板前列伝

ここに「伊尹、鼎を負う」という話がある。前述、夏王朝の十七代目に桀王という唐変木があらわれ、悪政の限りをつくした。その時、夏の諸侯の一人であった成湯

殺到するのだが、これは嘸うべき現象である。豊臣秀吉だって、徳川家康だって、国立の大学を出たわけではない。尾形光琳や池大雅が国立の美術大学を出たということもきかない。人の才能というものは、国立や私立や、学校での成績や卒業証書などという、吹けばとぶようなものに関わるものではない。

盗賊の首領だったと噂された蜂須賀小六は、秀吉に従って武功を立てると、阿波一国を与えられ、その子・家政は十七万三千石の大名として徳島城におさまった。また、石田三成だって、子供の時の茶の湯加減と茶の盛り加減とで、羽柴秀吉に取り立てられ、佐和山十八万石の城主として、豊臣政府の台閣に列した。

黄河の治水

板前や土方を軽く見る傾向が、日本人には強くある。だが、土工工事というものは一国の盛衰に重大な関係がある。中国の歴史は禹の治水から始まり、中原の安定は、秦の始皇帝の万里長城の造営に始まること、御存知の通りである。黄河の築堤も長城の築造も土方の所業によるものである。

中国は禹域の別名があり、中国の人たちは自国を中夏と称する。夏は禹から桀王にいたる十七代四百七十一年間の中国最初の王朝の名である。

黄河の氾濫が中国の民生に重大な恐威を与えていることは申すまでもない。禹は初め堯舜に仕えていたが、黄河治水の功により、舜から位を譲られて、天子の位に就いた。黄河の川筋は歴史を通じて見ると、元来の河口は渤海湾に注いでいた。それが金の大定年間の氾濫決壊で、開封の附近から南流して淮水に合し、黄海に注いだ。ところが、それから七百年たった清の咸豊年間に、また流れを変え、渤海湾に注ぐようになって、今日に及んでいる。そういう有り様で、暴威をふるう黄河の洪水は、禹の時に十年間続いたといい、また八年間続いたともいう。禹が舜から禅譲を受けて即位したのがBC二二〇五年だとされる。これにAD一九七二年を加えると、四千余年となる。いま、黄河の大小の決壊氾濫を二十年目に一回とすれば、この四世紀間には二百回に及ぶことになる。

孟子は禹の功績を讃えて、「禹、旨酒を悪みて、善言を好む」とか、「禹、外にあること八年、三たび其の門を過れども入らず」と云っている。黄河の流域に文化をうち樹てた大陸民族にとっては、この天災を防衛する治水という土工事は、まさに重大事業であった。

という人に目をつけたのが伊尹という料理人であった。

伊尹は成湯にコネをつけるべく、あらゆる方法をとったが成功しなかった。そこで一策を案じ、鼎をかついで成湯の邸に日参し、ついに志を達して、その板前となって住み込むことが出来た。伊尹の考えは、うまいものを作って成湯に食べさせ、次第にお近づきになろう、というのである。このやり方は、見事あたって、伊尹は成湯の側近の一人となった。次第に、成湯は伊尹の言うがままに従うようになり、ついに桀王を誅し、夏を滅ぼして、殷の天下をうち建てた。孟子に「伊尹、湯を相けて、以て天下に王たらしむ」とある。かくて、万民は夏桀の暴政をまぬがれることができた。中国の歴史は殷王朝の成立期をもって、伝説時代から離脱して史実の時代に入るものとする。まことに、中国の歴史の夜明けは伊尹の料理の手腕によって開幕されたことになる。

次に、荘子に「庖丁道」の話がある。戦国時代の魏の国に文恵君という殿様がいた。ある日、厨房にあらわれ、庖丁（板前）の牛を割くさまを見ていた。板前の態度が立派で、刀の使い方が節度になつてゐるのに感心して、「技もかくまで上達すれば立派なものだ」と、感歎の声を発して賞めた。すると板前氏は、かたわらに刀を置き、殿様の前に進み出て云うには、「私の志ざして

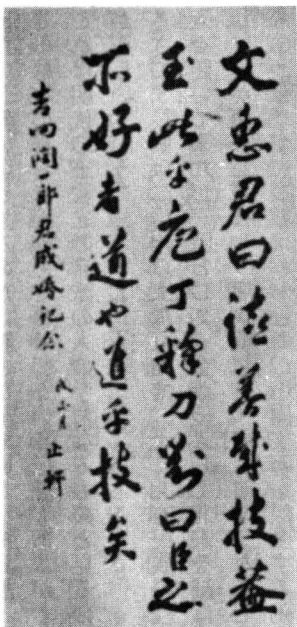
好きで、黄帝老子莊子を勉強していた。その頃、庖丁道に志ざしていた彼は、村の宴会で肉の料理を作つて出したところ、父老たちが感心して、「陳君の肉の切り方は均等で、これは見上げたものだ」といつて賞めた。すると、陳平が胸を張り、「俺をして、天下に宰たらしめば、この肉の如く、天下を公平に治めるであろう」と云つたという。そういう自信をもって陳平は精進し、ついに楚の項羽に見出されて、諸侯にまで列したが、後、漢の高祖に帰した。やがて、漢の丞相となり、恵帝から少帝、文帝を補けて仁政をひかせ、ついに呂氏の乱を平げて、漢の天下を泰山の安きにおいた。この漢は前後両漢を通じて、四百余年の久しきに亘つて中国をまとめたが、その政治の流れの中に、漢初の丞相陳平の均肉の精神が貫流していることを見逃してはならない。

腕 く ら べ

鼎などの料理道具をしょって、成湯家に住みついたコックの伊尹が、どんな料理を作つたか、その献立や料理法についての記録がないから、これ以上の詳述はできないが、おそらく、献立に目黒のサンマなどを採り入れて、

いるところのものは道でして、技などというケチなものではござんせん。道というものは技などよりもはるかに進んだものでござんす」といい、さらに語を継いで、自分の牛をさく刀の使い方についての詳しい講釈を殿様に聞かせるのであった。きき終つた殿様は「よくわかつた、今日は養生の道について、いい教えを聞くことができた」と、感じるのであった。料理道は養生道にも通じ、政治道にも通じ、柔道にも通じている。日本柔道の創始者嘉納治五郎先生は進平斎と号した。これは庖丁の言葉の「進平技矣」から採つたものである。

諸橋轍次先生書



さて、その次に、漢の陳平の「均肉」の話がある。陳平は若い頃には貧乏で、嫁になり手がなかつた。読書が

腕によりをかけたであろうことは想像にかたかない。

魏の文恵君のところに行った板前氏の牛のさばき方については、荘子に記録が残っている。手の振りぐあい、身の動かし方にリズムがあり、そのリズムは「桑林の舞に合し、經首の会に中る」としてある。桑林の舞というのは、伊尹の料理をかみしめ、その味のわかつた湯王のとされる曲舞の名である。經首というのは、古い時代の聖帝堯の作つた音楽である。そのように古代中国の政治は堯舜から禹につがれ、唐変木の桀があらわれると、湯王がこれに代り、その末に脳タリンの紂があらわれると、周の武王これに代る、ということになる。六芸の一つに楽があるが、音楽の調子の基盤をなすものは味であり、味を生み出すものは、料理の腕であり、塩梅であろう。

魏の板前氏は、「世の中で料理の上手といわれる者でも、年に一度は刀をかえる。まして、下手な奴になると、月に一丁だめにしてしまう。手前はこの刀で何千頭の牛をさばいたことか。もう、十九年間使っているが、刃こぼれ一つしていない」というのである。庖丁という称び名は、コック、板前のことで、もともとは料理人の称だつたものが、その庖丁があまりに刀の使い方が上手だつたので、ついに日本では、刀そのものを庖丁と称ぶようになつた。これについて荘子は、仕事はなんでも無理を

せずに、道になつてやるのがいい、と述べている。
漢の陳平は、この老莊の道を学びとつて、均肉の法を
体得し、「天下を均しく治める」経綸をのみだした。も
し、陳平が漢に帰さなかつたとするならば、漢は呂氏の
乱により、僅か三代で滅び、天下は再び騒乱に陥いつて
いたであらう。

関守の論陣

日本では残念ながら料理人が大臣になつたことを聞か
ない。近來になつても、板前風情がとか、コックの分際
でとか、蔑すみの思潮が依然として消えていない。だが、
河原乞食がテレビのおかげで芸能家となつた今日では、
板前の一部が先生と呼ばれるようになった。しかし、そ
の母胎の料理店の方は相かわらず、水商売とか道楽商売
とかよばれ、卑しむ傾向は絶えない。

それ故か、この経済大国の消費時代に、法律は料理
店だけに特別の「料理飲食税」なるものの徴税義務を課
している。もともと、過渡的な奢侈税だつたこの税が、
敗戦の貧乏国から経済大国になり、さらに福祉文化国家
に発展しようという今日まで存置され、相もかわらず水

商売に「関所」を兼ねさせて、客をいちいち吟味させて
いる。そんな弱い者いじめを恥ともしない政治家の神経
がおかしい。

(一)「烏合の衆」

飲食店は無組織の、いわば烏合の衆である。現代の政
治の手は組織なきところには指向されない。保守は資本
組織に結合し、革新は労働の組織に結合する。浮き草の
如き浮動票の大部は、この烏合の衆が占めている。棄権
の大部はこの部分にある。料理に「かくし味」というも
のがある。政治家たる者はこの味を味得すべきである。

(二)「無形文化財」

浪費と贅沢を区別しなければいけない。ゼイタクとい
うものについて、戦時中の妄念から脱却しなければなら
ぬ。いまだき、九百円ぐらいな食事代金が奢侈贅沢と見
なされるであろうか。またそれは国民経済に害毒を流す
敵であるかどうか。特に手作りの貴重さを確認すること
が大切である。パロリ平げる料理だつて、無形文化財と
しての資格は充分にある。

(三)「遊興飲食」

飲食は遊興ではない。極道→放蕩→遊興→慰安→レジ
ヤールの系列に、飲食が列するものと考えるのがふまじめ
である。この糞味増混濁の考え方は、都会地の飲食店

(その大部分は飯屋)の大かたを実体不明のどっちつか
ずのものに追いやつてしまった。これを一代交配雑種と
いう。中国のめし屋が世界の隅々にまで行き渡つてい
るのに、日本の飲食店がこのままのかたちで、何処の国へ
出かけて行けるであろうか。

(四)「月と六ペンス」

めし屋と高級店の見境を明らかにすべきである。会社
の経費として支払われる一食一万円也の高級料理代と、
源泉税差し引きの月給の手取り額から支払われる千円の
めし代とは、同日に論ずべきものではない。あれは月で
あり、これは六ペンスだからである。そういう呉越同舟
の扱いにより、上はますます野放図になり、豪華と絢爛
を誇りとし、下はいよいよミミッチク、安易の功利を旨
とする。

(五)「粗食と美德」

日本は有史以来の粗食時代となつたといわれる。家畜
と同じに、カロリーばかり計算して、人間をつちかう滋
味のような、数字にあらわれないものを無視している。
孟子は、熊掌と魚と、いづれかを選ばなければならぬ
時には、自分は熊掌をとる、と云っている。論語の「疏
食を飯い、水を飲み、脰を曲げて之を枕とす。樂しみ亦
たその中に在り」(述而)も、粗食を讚美しているので

はない。「亦た」を味読すれば、よくわかる。日本の「武
士は食わねど高楊枝」も、それと同じように理解すべき
ものである。こういう美德の曲解を基盤として、粗食を
勧奨するような、物の考え方を支持しているのが料理飲
食税である。

(六)「エンゲル係数」

ドイツの経済学者エンゲル(一八二二)は「食物のため
の支出が総支出に占める割合は、家族が貧しいほど大き
くなる」と指摘している。これを逆にいえば「家計の食
費の割合が小さければ小さいほど、家庭はゆたかである」
ということになる。これは十九世紀の「ベルギー労働者
家族の生活費」に関する彼の統計の結論であり、これを
そのまま今日の文化国家に当てはめる訳にはいかない。
百年も前のベルギーの労働者の食費は生存費用であり、
今日の日本のそれは文化費用である。マルクスについて
もエンゲルスについても、この点の読みが浅い。論語と
同じくもつと深い読みを必要としなければならぬ。だか
ら、インスタントラーメンを食べてから、一万円の全身
美容に出かける女性がいる。これはエンゲルの理論を以
てすれば、まことに裕福なことになる。食い物は二の次
として、ソレ月賦の中古車、ソレ流行のパンタロン、ソ
レぬいぐるみのパンダ、と追いまわされている日本の現

代相。この逆立ちの世相を誰が推進したか。それは、生まれた子供が二十七才にもなるのに、離乳食を与えようとしない親馬鹿の過保護にある。もういちどいう。いまや、食費はエンゲル時代の原始的生存費用から脱して、文化的福祉費用に転化している。

(七)「順逆と雌雄」

われわれは国民の義務として、納税の義務は教わったことがあるが、徴税の義務というものは教わったことがない。お上の命令によって、それに代理させられての徴税の義務というものは、殿様に代理しての代官の権利とはちがう。これは憲法学的に見てどんなものだろうか。刑法で被疑者が黙否権を認められ、労働法で労働者に罷業権が認められている今日、或る特別な営みの弱者にだけ、お上の代理業務を強制付託するのは、封建乃至独裁のそしりをまぬがれない。これは拒否できないものであるか。日本列島の人手不足の皺よせを一手にひきうけ、娘の婚期を延ばさせて、手不足を補っているのが飲食店の実情である。その細腕によって徴集された地方税なるものが、農民に減反補償費として支払われ、また、公害企業の施設改善費に当てられてはいないか。いづれが順でいづれが逆か。烏の雌雄を誰かが弁別しなくてはいけない。これは法哲学の問題として、おおかたの良識

に俟つことにしよう。

いじわる

へ通りゃんせ、通りゃんせ。ここはどここの細道じゃ、うまいもの屋の細道じゃ、お金のない者通しやせん。……行きはよいよい、帰りはこわい、こわいながらも、通りゃんせ、通りゃんせ。

これは子供のいじわる。大人のいじわるは、もっと念がいて、悪質である。

へ斯様に候者は、飲食の宿、亭主の何某にて候。扱も歳入歳出、御仲不利とならせ給うにより、……大臣聞し召し及ばれ、国々に新関を据え、客人を堅く選み申せとの御事にて候。……民の心は筋違のく、露けき銭やしおらん。……これやこの、取るも取らぬも関守の、ふところかくす、霞ぞ春は口惜しける。なにはさておき行く銭の、甲斐あることぞ願わるる。(長唄、安宅勸進帳の替唄、仇平肝腎濁)

故智効かば匂いおこせよ梅の花

政治なしとて春なわすれそ 食散人

おの吉

日本橋店 / 三越本店正面 / 241-7471 ~ 2
水道橋店 / 地下鉄・国電 / 812-6268 ~ 9
玉川店 / 水道橋駅前 / 709-2199 直通
玉川高島屋内